

い。

### 5. 風水害はなぜ変動する

風水害の直接原因は激しい気象現象であるから、その変動が気象条件に支配されることはいうまでもない。一方、それはまた社会条件によっても影響されることは既にのべた通りである。つまり、風水害は気象条件と社会条件の二つによって変動しているわけである。

ところで、気象条件は年々複雑に変動しているが、それは長短いろいろの週期的変動の合成と解されるものが多く、既に多くの人々によっていろいろの週期が検出されている。ただし、そのうちには、各種の現象に現われて、存在の確かな週期もあり、あるいは特定の現象、特定の期間だけにしか現われず、果してそのような週期の存在するか否か疑問のものもある。が、何れにしても、風水害の変動が気象条件の週期的変動に大きく左右されていることは確かである。

一方、社会条件の変化は人口の増加や文化の進展に伴うものであるから、明瞭の週期など見出し兼ねるであろう。しかも、風水害に対する影響を分析して見ると、人口とか施設とかの増大によって被害対象物の増大するという方向と、防災対策の強化によって被害を減少させるという方向があり、実際の影響はこの差引である。第1

表に示したように、今世紀に入って風水害が増大したということは、その間に於ける被害対象物の増大が防災対策の効果を上廻るほどであったのである。このように、風水害に対する社会条件の影響は、長期に亘って漸次に現われると解すべきであろう。

以上のように考えて来ると、第1図と第2図に示された風水害の変動は、週期に関しては気象条件に起因するものと見ねばならない。しかも、気象現象に於ては9年週期がいろいろの場合に検出されていることから見て、激しい暴風や豪雨の出現にもこの週期が卓越し、それが風水害を変動させていると考えるべきであろう。ところが、風水害変動の振幅が漸次大きくなっているのは、暴風や豪雨が漸次激しさを加えて来ていると見るのは当たらないのではないか。それは主として社会条件に影響されていると考えたい。

風水害の変動は気象条件によることであるから、いまの処、これを人力で左右することは不可能である。しかし、この変動の振幅は社会条件によるとすれば、防災対策を強化して、振幅を漸次ちぢめて行くことは可能である。そして、変動の谷はいまでも低いのであるから、振幅さえちぢまってしまうば、防災対策の効果は十分あがったことと考えてよいであろう。

### 〔書評〕

根本順吉、吉野正敏、倉嶋厚、沼田真著 季節風

B6版、294頁、地人書館、昭和34年10月刊、定価390円

季節風という言葉は便利なのでよく使われるが、これを細かく論じ、明確な像をつかもうとすると、多くの問題が生ずる。高気圧、低気圧の去来のはげしい中緯度地帯にある日本などでは、季節風は統計的な結果から理想モデルとして取出された概念であるからであろう。相当古い時代にこういう概念が抽出されていたことは、まことに驚嘆すべきことであると思うが、現在では更に詳しい季節風についての知識が、他の分野と関連して要求されて来た。

「気象台では何も知らない」(序文)という為でもないだろうが、今度はじめて季節風についての単行本がで

た。その発見の歴史からはじまって、定義、分布、さらに、風土文明に与える影響、植生との関連など、あらゆる観点から要求に応じて詳細に、面白く述べられている。風土との関連などはかなりの資料、図、写真などによって楽しく読むことができる。ただ、難を言えば、「おろし」がなぜ乾燥して冷いのか?などの気象学的説明が不十分である。大事なこれらを抜きにして一足とびに大気環流に進んでいるように思われて、少し失望したが、しかし最初の本としては、一里塚ではなくて十里塚にも相当するものであろうか。(有住直介)